

## 小学卒だけの大英語学者：田中 菊雄 について

2002.9.11

(2015.8.13 補筆)

西田 巖

Richmond E.S.

はじめに

英語学者の「田中菊雄」と聞いて、ああ、あの人がご存知の方は教養としての英語に深く関心をお持ちの方とおもいます。

ここでは、初めて「田中菊雄」を聞かれる方を前提に彼の人物紹介をしてみたいと思います。

田中菊雄を後世に名を残させたのは、小学卒だけの学歴にもかかわらず最後は山形大学の英文科教授（厳密には山形大学を退官後、神奈川大学に奉職）となり、そして、なんといっても、「岩波英和辞典」の編纂に携わり、同辞典を世に残こしたことにあります。

もちろん彼は、同辞典の編者としてだけでなく、無類の読書家でもあり、英語研究者して多くの著書も残しています。なかんずく有名なのは、日本が米英を相手として太平洋戦争に突入する直前の 1940 年に「英語研究者のために」（初版）を著し、当時、英語が「鬼畜米英の敵国語」として抹殺されようとしていた時に敢然と時流に立ち向かったことです。この「英語研究者のために」は戦後も何回も重版出版され、英語研究者だけでなく（彼のように）独学で英語を勉強する多くの人に勇気と指針を与えてくれました。

### I. 田中菊雄と岩波英和辞典

ここでまず、彼の著書「英語研究者のために」の自伝部分から簡単に田中菊雄の略歴を拾ってみましょう。

彼は、1893年（明治26年）北海道で生まれています。家庭はあまり裕福でなかったためか小学校を出た数え年15（満年齢13または14の時）の時に当時の国鉄に入り列車の給仕として働きはじめました。ある時、旭川駅の列車給仕をしているときに偶然に研究社の英語雑誌「初等英語研究」を手にし、この雑誌に掲載されていた英語の自習書を手引きに自学自習で英語の勉強を始めました。ある日、勤務中に、西洋人の乗客から金をわたされ「卵」を買ってくるように言い渡されたのですが、これがよく聞き取れず“タマゴ”か“タバコ”不安であったので、“Tobacco or egg?”と聞き返し、そして“Egg, please”という答えを聞き取れたことが大変な喜びであったそうです。このような英語との出会いが後に英語への道にまっしぐらに進む契機となったようです。その後、札幌に鉄道地方教習所が開設され、勉強のできた彼は第一回の入所試験に見事にパスし6ヶ月間この教習所で現場の仕事をはなれて勉強に専念するとともに、教習所で洋行帰りの先生方から英会話を習いました。

18歳の時に、旭川郊外の農村にある小学校の代用教員に採用され、勉強したい一心で鉄道を辞め、翌年、正教員の試験に合格しました。小学校の教員時代には、5年間にわたって旭川市内に住む米国の老婦人のところまで週三回、往復4里の夜道を真冬でも歩いて通い英語の勉強を続けました。

24歳の時、さらに英語の勉強を深めたいという志が強まり、旭川の小学校を辞し、上京して、友人の斡旋で鉄道院に勤める傍ら夜間の英語専門学校に通いました。（昼間は、鉄道院で欧文係に所属し翻訳などの仕事をしたそうです。）

大正9年(1920年)9月、恩師（山崎貞）から、広島県の呉の中学校で肩書きはなくとも実力のある英語教師を募集しているところを紹介されました。これを契機に、鉄道を辞め生涯の仕事として英語教員の世界に入る決心をしました。このとき、数えの29歳でした。呉中学での4年間は、英文学の研究にいそしむだけでなく、中等教員、高等教員の英語科検定試験に合格し正式の教員資格を取得しました。その後、新潟県の長岡中学、富山高校などに奉職し、昭和5年（1930年）に旧制山形高校（現在の山形大学）につとめ、爾来、山形高校、山形大学で教育者・研究者として勤めあげ、昭和35年（1960年）に定年退官しました。30歳代の長岡時代から富山時代にかけてすでに研究社の「岡倉英和大辞典」初版の編集にも参加していますので、この頃にはすでに英語研究者として世に認められていたものと思われます。この山形高校に赴任の直後から「岩波英和辞典」の編纂に関わり、それこそ文字通りの寝食を忘れんばかりに辞書編纂に没頭しました。そして、7年後の昭和11年（1936年）に「岩波英和辞典」の初版を上梓し、その後も終始一貫、この辞書改定改版に携わり戦後の昭和33年（1958年）に、現在の「岩波英和辞典」（新版）を世に出しました。

さて、この「岩波英和辞典」の特徴は、英語辞書の最大にして最良といわれるイギリスの Oxford English Dictionary(OED)を底本として、これを克明に精読し簡約した英和辞書といえます。

ここで、OED について若干補足すれば、OED いうまでもなくイギリスが誇る世界最大の英語辞典で、企画から完成（1928年）まで70年をかけて編纂されたものです。1150年以降に文献にあらわれた全ての語（中期英語以降の全ての単語）について、“歴史的原理”に基づいて編集されています。ここでいう“歴史的原理”とは、各語に関して、何時、如何にして、如何なる形、綴り、また、如何なる意味をもってその語が英語となったかを可能な限り遡り、また、その後どのように意味の発展、変遷があったかなどを克明に時代順に網羅しています。（余談：OED については、小生のロンドン時代にちょっとしたエピソードがあります。機会をみてまた述べてみたいと思います。）

このように、「岩波英和辞典」は OED を底本にその編集方針を貫いて簡約化された英和辞典です。したがって学習用の辞書、また、現代語の意味をサッと知りたいという用途には不向きと言えます。しかし、もし英語の堅物の本を読む時、意味の理解に疑問を感じたり、さらに深い解釈を知りたい時にこの辞書を引いてみますと勉強となり啓蒙されることがあります。（ほんの一例ですが、名詞の **study** といえば、現代用法では第一義的には、「勉強、研究」と理解しますが、「岩波英和辞典」では、まず原義として、‘熱心、苦心’と説明し、(a)で工夫：目的を達しようとする工夫、苦心；その目的物、(b)として、研究、研学、勉学、というふうに説明しています。）

なお、参考までに、この「岩波英和辞典」は今では古書店でもなかなか見つからず、見つからなくてもかなりのお値段がついています。もし本書をお持ちでしたら大事に手元に残されることをお勧めします。

## II. 田中菊雄と英語暗黒時代

以前、このホームページで「お話：日本における英語史」を載せたとき、その中で、わが国で、つい半世紀前の戦前、戦中時代には英語が「鬼畜米英の敵国語」として扱われた時期があって、この「英語暗黒時代」に英語学者・研究者がどのように考え、また、生きた

のかに関心を持っていると記しました。

実は、田中菊雄もこのころ、現在の山形大学・英語科の気鋭の学者であり、「岩波英和辞典」の編纂、改定に心血を注いでいました。当時は日米関係の暗雲が益々広がる中で英語排斥運動が起こり、多くの英語学者は非常に肩身の狭い思いをしていたにちがいません。世の中の大勢がこのようにならった時に、彼は敢然として「英語研究者のために」（初版）1940年に世に出し、時勢に反論と警告を發しました。

以下、戦後重版としてだされた彼の著書「英語研究者のために」（講談社学術文庫版）の中から、当時の田中菊雄の考えや行動を拾ってみたいともいます。

まず、彼は、同書の「英語排斥時代の回顧」中で、当時の状況を次のように述べています。

『日本が第二次世界大戦に突入する前後の頃、英語排斥熱のはなはだしい時代がありました。毎日の新聞に、また毎月の雑誌に、中等学校英語科廃止論が掲げられました。軍人が文部省の視学委員になって幅を利かしました。ある時、旧制山形高等学校に来た軍人が、寄宿舎を見た後で私たち教授陣に訓示をしたことがありました。寄宿舎の読書室に女の絵が掛けてあるとは何事だ！山本五十六大将の写真にかけかえよ！というのです。（女の絵というのはモナ・リザの名画の写真だったのです。）・・・』、『・・・鉄道省はその当時のお金で60万円の大金を投じて全国の駅の掲示板から英文の掲示をことごとく消し去ったのです・・・』。そして、また、『そうしているうちに、政府では、外交官の試験に外国語を課さないという告知をしました。外交官がなまじ外国語を知っていると向こうになめられる恐れがある。通訳を下僚にやらせるほうがよい、というのです・・・』。

以上のような状況の中で、彼はついに我慢ならず「英語研究者のために」を著し、その中で次のような内村鑑三の言を引用し堂々と反駁を行いました。

『彼の語を知らざるは彼を知らざるなり。彼の語を通ぜずして彼と親交を結ばんことはほとんどでき得べからずことなり。外国語の知識より来たらざる外交は表面的礼式に過ぎず。彼を信じ、彼に信ぜられ、心情の深き奥底において彼とともに永久の平和を結ばんと欲せば、彼の語に通じ、彼の想を解し、彼の感を以って我が感となさざるべからず。自国の語にのみに満足する国民は畢竟、攘夷、鎖国の民たるをまぬがれず。』

次に、1940年（昭和15年）、時局が緊迫する中で出版された初版の冒頭の序で彼が記した気概と反骨精神の真骨頂を、少々長いですが引用してみますと、

『・・・国際関係の動きは今後いよいよ複雑微妙の度を深めていくことは火を見るよりも明らかなことで、したがって今後外国語習得の必要いよいよますます急なるものあるは言を待たぬ所である。しかるに近時ややもすれば外国語軽視の風潮の看取せらるることは、まことに慨嘆に堪えぬしだいである。

おもうに、今後の国民は、各自その専門とする分野においてファースト・ハンドに知識を世界に求むるの必要が益々多くなると共に、各自随時随所において日本国の代表者として国運の伸展に寄与し得るの素地を平素に於いて養っておかなければならない。外国語の学習のゆるがせにすべからざる所以である。しかも外国語の習得たるや決して一朝一夕にして得らるるものではない。

更に又、言語事象として、外国語を科学的に研究することは非常に興味あることで、その文化的意義は極めて深い。ゲーテが「外国語を知らざるもの者は自国語をも知らざるなり」といったのはこの故である。

本書は、外国語研究の第一歩として、英語を研究せんとする人々のために進むべき方向と分野と手段を示めんとする意図に出たものである。若し多少にても斯学に志す人々のご参考となるならば著者の幸い之に過ぐるはない。 — 1940年秋 』

1940年といえば、この一年前に日米通商条約は破棄され、翌年41年にアメリカを相手に太平洋戦争に突入するという緊迫した年でありました。国民は、アメリカやイギリスは鬼や畜生のような憎い相手であると煽られ、敵国語である英語を使ったり勉強したりすることはもつてのほか・非国民であると非難された時代です。(今にしてみればお笑いですが、野球をはじめスポーツでの英語用語はすべて日本語に置き換えられ、女性の“パーマネント”は“電髪”、“スカート”は“西洋袴”に、男性のズボン“軍袴”などといったそうです。) このように、日本全体がある種のヒステリー状態、今で言うマインド・コントロール下にあったときに、英語関係者は、孤立していくか、もしくは口を閉ざさざるを得なかったことは想像するに難くありません。しかるに、田中菊雄は敢然と時流に反論し、叛旗を翻したのです。ましてや、彼が、山形大学の教授であり“国家公務員”であるという立場を思うと、相当な勇気がいったことは間違いありません。(ついでですが、彼は、序の日付を「1940年秋」と書いています。当時のムードからすれば、年号は、「紀元x x年」か「皇紀x x年」、せいぜい良くて「昭和x x年」と記したものでしょう。しかし、彼は敢えて西暦1940年と記していることにも彼の意気がうかがえます。)

以上、述べてきたように、田中菊雄は、学歴は小学校卒にもかかわらず、英語の道を究めて、教育者としても多くの人材を育ただけではなく、時の社会の大きな流に敢然と挑み、自分の信念を貫いて、1975年享年82歳で一生を終えました。

おしまい

戦争が終わり半世紀以上たった現在の日本は、平和で経済的にも繁栄を謳歌し、猫も杓子も「英語」、「英語」の世の中となりました。2011年（平成23年）からは小学校4年、5年で英語の授業を始められました。これからは、英語が出来ない人はあたかも2流国民となりかねない風潮です。（現に、日本の一流企業でも昇進資格に英語の点数も評価しているそうです。また、一部の企業では英語を社内公用語にすると決めた企業もあります）。

いささか英語万能の風潮が強すぎますが、いずれにしても、「につくき鬼畜米英の敵国語」の呪縛から解き放され好きなだけ英語が勉強できる時代になりました。しかし、この自由は、我々のほんの一代前の親たち世代の大きな犠牲（戦死者300万人、広島・長崎の原爆被爆、主要都市の空爆による灰燼など）の上で、（たとえ敗戦であったとしても）勝ち得た民主主義と自由のおかげであることを忘れてはなりません。

さて、そこで、私一人の杞憂であるかもしれませんが、現在の民主主義と自由を謳歌できる時代がいつまでも永遠に続くのではなく、以外に簡単に反動の時代に戻ってしまうのではないかと危惧します。我々日本人のルーツは、アングロサクソンのように狩猟民族ではなく、農耕民族であり村落共同体の協調性を重視する社会です。言い換えれば、日本人社会は、均質・一様性を重んじ、横並びに安心し、出る杭は打ち、足の引っ張り合いする性癖が強くあります。

このような国民性があることを前提にして、荒唐無稽ではありますが、時の為政者があらゆる手段を尽くして、70年前の戦前に、「英語は鬼畜米英の敵国語」として国民を英語排斥運動に駆り立てたような時代が再来しないとは限りません。

お隣の中国は日本を抜き世界の第二の経済大国です。今後もますますアジアで覇権を強めてくることが考えられます。日本は言うまでもなく、1000年以上前から中国文化の影響を受け漢字文化圏として米英文化とのとの接触よりもはるかに長い歴史的なつながりがあります。

したがって、時代が変わったとき、為政者は、

・「横並び平等を尊ぶ我が日本社会で、英語の出来る、出来ない人々を作るのはいかなものか。英語はそれが必要な人だけが勉強する専門科コースにすればよい」、

・「日本はアジアの一員であり、わが国にとってこれからは大国中国との関係が大事である。よって、学校では、英語は選択科目にし、中国語を必須科目とせよ」

・「こんなに英語の学習に時間と金を費やしても英語がマスターできないならば、これは国家的な金、時間の大きな浪費である。よって、この金でコンピュータ・IT 技術を用いて超小型・高性能の自動翻訳機を開発・実用化し、国民はそのコンピュータの利用の仕方を習熟すればよい。これによって無駄な語学教育の重荷から開放されるべきである」

云々と再びあらゆる手段使い国民を洗脳し、マインドコントロールしてくる時代が来るかもしれません。

時代は必ず変わるものであります。しかし何時、どのような方向に動こうとも、たまたま「英語」というものにミーハーでなく少しばかりは「知」として関わってしまった者として、田中菊雄の信念を持った反骨の生き方は時には振り返ってみたいものであります。

=以上=